[課程―２]

# 審査の結果の要旨

氏名　　松原　三郎

本研究は、一般人口（に近似した集団）での偶発的膵嚢胞の頻度と特徴を明らかにし、また膵嚢胞が膵癌に関連する因子であるかを明らかにするために行われた、非膵疾患患者（一般人口に近似した集団をこのように設定した）1,226 例と膵癌患者 114 例における過去に撮像された MRI を調べた横断的研究であり、下記の結果を得ている。

１．　膵嚢胞は非膵疾患患者の 10%に発見され、年齢と共に増加する傾向にあった。男女間に頻度の差は見られなかった（P=0.59）。大きさの中央値は 8mm（5-23mm）で、単発が多く（64.2%）、多房性が多く（54.5%）、主膵管拡張を伴わないものが多かった（64.2%）。膵頭部に存在するものは 51.2%に認められた。嚢胞の大きさ、数、形態、部位、主膵管拡張の有無と年齢の間に有意な相関は認めなかったが、嚢胞の数に関しては、年齢と共に増加する傾向が見られた。

２．　膵癌群では、膵嚢胞は 55.3%に認められ、非膵疾患群に比較して有意に高頻度であった（P<0.01）。年齢、性、嚢胞の有無を変数に多変量解析を行ったところ、嚢胞（オッズ比 9.803, P<0.01）と年齢（60 歳以上）（オッズ比 1.681, P=0.033）が有意に膵癌に関連する因子であった。嚢胞の特徴に関して単変量解析を行ったところ、数、形態、主膵管拡張の有無、部位に関しては両群に差はなく、大きさ（10mm 以上）のみが膵癌群で有意に高かった（P<0.01）。多変量解析では、同様に大きさのみが有意な因子であった（オッズ比 3.913, P<0.01））。

３．　膵癌群のうち、膵癌より頭部側に存在する嚢胞は、膵癌による膵管閉塞に伴う仮性嚢胞などの可能性が低く、膵癌発生以前から存在していたと考えられるため、原発性嚢胞と呼称した。原発性嚢胞に限定すると、膵嚢胞は膵癌群の 23.7%に認められ、この場合でも非膵疾患群に比較して有意に高頻度であった（P<0.01）。多変量解析では、嚢胞（オッズ比 2.265, P<0.01）と年齢（60 歳以上）（オッズ比 2.318, P<0.01）が有意に膵癌に関連する因子であった。嚢胞の特徴に関して単変量・多変量解析を行ったところ、単変量解析では嚢胞の大きさ（10mm 以上）が有意な因子であったが（P<0.01）、多変量解析では有意ではなかった(オッズ比 2.813, P=0.055)。しかし P=0.055 であり、サンプルサイズが大きくなれば有意となる可能性が考えられた。

４．　２．３．の結果より、膵嚢胞が膵癌に関連する因子である可能性が示唆された。また、大きい嚢胞（10mm 以上）ほど膵癌に関連する可能性が高いことが推察された。

以上、本論文は一般人口（に近似した集団）での偶発的膵嚢胞の頻度と特徴を明らかにし、膵嚢胞と膵癌の関連の可能性を示唆した。膵嚢胞の特徴と膵癌の関連に関しても検討を行い、今後の膵癌診療の向上に貢献すると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。